# PLAT CALENDAR

## 9 September

2［日］第52回東三民踊まつり◉PLAT主ホール
8［土］―9［日］PLAT小劇場シリーズ 劇団ひふく劇場『ただいま』◉PLATアートスペース
10［月］―11［火］バレエスタジオプリエ 第6回おさらい会◉PLATアートスペース
12［水］―14［金］豊橋演劇鑑賞会 第268回例会 俳優座劇場プロデュース『十二人の怒れる男たち』◉PLAT主ホール
15［土］―17［月・祝］プラット親子わくわくプログラム2018『不思議の国のアリス』◉PLATアートスペース
16［日］Dance Act Vol.3◉PLAT主ホール
20［木］大学・短期大学・専門学校 進学ガイダンス◉PLATアートスペース
22［土］―23［日］豊川用水通水50周年記念『迸る！』◉PLAT主ホール
23［日］MONAH ZAYN BELLY DANCE SCHOOL 発表会◉PLATアートスペース
24［月・祝］豊川堂英語教室スピーチコンテスト 小学生の部◉PLATアートスペース
29［土］―30［日］29土-30日　『チルドレン』◉PLAT主ホール
29［土］微笑亭さん太 独演会◉PLATアートスペース
30［日］さくらピアノ教室 ピアノ発表会◉PLATアートスペース

## 10 October

6［土］―7［日］6土-7日　PLAT小劇場シリーズ・プラット親子わくわくプログラム2018
KAKUTA『ねこはしる』◉PLATアートスペース
7［日］第61回豊橋邦楽大会 日本舞踊の部◉PLAT主ホール
8［月・祝］プラット親子わくわくプログラム2018
劇団四季 ファミリーミュージカル『魔法をすてたマジョリン』◉PLAT主ホール
8［月・祝］金井ゆかり&野畑さおり 二台ピアノの響演◉PLATアートスペース
14［日］第2回クリエプレバレエコンクール◉PLAT主ホール
19［金］桂文我 独演会◉PLATアートスペース
20［土］―21［日］s**t kingz「The Library」◉PLAT主ホール
27［土］―28［日］『華氏451度』◉PLAT主ホール
29［月］第26回三遠南信サミット2018 in 東三河◉PLAT主ホール

表紙／「チルドレン」
撮影：尾嶋 太
企画・発行／公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン／味岡伸太郎＋有限会社STAFF
平成30年8月発行 33号［隔月発行］

TOYOHASHI ARTS THEATRE PLAT

# PLAT NEWS

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2018年9月―10月
vol.33

## プラットニュース

CONTENTS

表紙「チルドレン」
2
INTERVIEW：1
「チルドレン」
人間は、自ら作り出した科学に、
自ら潰されていく。
栗山民也
4
INTERVIEW：2
「不思議の国のアリス」
アリスの世界へ一緒に
迷い込んでください。
森山開次、まりあ
6
INTERVIEW：3
「ただいま」
旅をしながら
作品が生まれていく。
永山智行
8
TALK
KAKUTA「ねこはしる」
そうなんだ、きみとおれ
いっしょに風の音をきく、
いっしょに笑い、はしる！
KAKUTA座談会
10
INTERVIEW：4
「華氏451度」
「静かに忍び寄る不安」
今やらなければと思った。
白井晃
12
INFORMATION
PLAT主催公演情報
14
PURA PURA
バラコの寄り道ぷらぷら
桑原裕子
「わからないから、わかりたい」
15
SUPPORT／TICKET CENTER
16
PLAT CALENDAR

# 「チルドレン」

## 人類の叡智を問う、注目の人間ドラマ

**9月29日[土]・30日[日]13:00開演**
**作＝ルーシー・カークウッド**
**演出＝栗山民也**
**翻訳＝小田島恒志**
**出演＝高畑淳子、鶴見辰吾、若村麻由美**
**会場＝PLAT主ホール**

**人間は、自ら作り出した科学に、自ら潰されていく。**
**地球は、その人間たちの過ちの繰り返しを、ただ黙って受け入れているだけなのか。**
**「THE CHILDREN」=「子供たち」というタイトルの意味を、地球全体が考える時なのだ、と思う。**

演出
**栗山民也**

聞き手 中島晴美 穂の国とよはし芸術劇場PLATシニアプロデューサー

**中島**── ルーシー・カークウッドさんはまだ34歳と若いイギリスの作家なのですね。

**栗山**──『チルドレン』は、ロンドンにあるロイヤル・コート劇場(注1)で生まれた作品だったことに、まず興味があった。僕がイギリスにいた頃、ロイヤル・コート劇場は「劇作家の家」と呼ばれていて、公共劇場としての国家予算で、どんどん新しい才能の作家を育成していた。その豊かな土壌から生まれた作品なのだから、当然世界と向き合ったカタチの物語になっていると思った。

彼女の、この作品の2年前に書かれた『チャイメリカ』(注2)という芝居のときのインタビューで、「国境って、どんどん意味のないツールになっている気がして」という彼女の言葉を読んだことがある。つまりこの作者は、実に柔らかな視点で国境を超え、地球規模の立場で諸問題を捉えるところから出発している。地震のほとんどないイギリスという国で、そのイギリスの作家が描いた震災と原発事故のドラマは、だから地球の裏側である福島がそこに見えてくるのは、当たり前のことなのだろう。

**中島**── ある契機にいろんなものが崩れて、それを人々は埋めようとする過程に興味を持たれたのでしょうか。

**栗山**── 日本ではすぐに社会派というレッテルをつけて、反体制としてみる傾向がある。だがイギリスなどの成熟した国々の作家たちは、作品の背景にその時代と向き合うべく社会を当然のように書き、その状況の中での人間同士のドラマを描く。原発がいかに人間を滅ぼしていくのかのみをクローズアップで描くのではなく、震災はもちろん天災だけど、原発の事故は人災として、それを取り巻いていた人々の生活と責任、そしてその後の社会の変化までを描く。

もちろん地球規模の復興を願って彼女はこの作品を書き始めたのだろうが、そこでは人々の心の復興に比重を置いて描かれているように思う。非常に毒のある知的なジョークなどの会話も面白いが、どこか登場人物の内側には病的なPTSDというか、体験したその震災による強度のトラウマが、登場人物たちの中から始終流れる波のように見え隠れしている。だから、なんでもない日常の会話の隙間から、彼らの悲痛な叫び声が幾度となく聞こえてくる。

**中島**── セット自体も少し歪んでいるというか。みんなが危うい会話をしているという感じですね。

**栗山**── つまり幕開けから地震によって傾いているんだね。世界が傾いているところから始まる。この3人の置かれた地平というか立ち位置というか、それを象徴していると思うが、そういう意味で床が傾いているというのはすごい視点だよね。地球がもうすでに傾いたあと、そこで人間がどう生きるのか。『チャイメリカ』もそう。血だらけの天安門なんだよ。それが芝居になって、劇場で展開されていく。

**中島**── しかも『チャイメリカ』はアルメイダ(注3)、『チルドレン』はロイヤル・コートですものね。

**栗山**── イギリスの現代劇は、シェイクスピアにしても同時代人として受け止めるべきだと考えているから、だれも古典だと思っていない。いつも、今を見つめることが、根っこだと考えている。日本は古典なら、すぐに保存しちゃうけど。

**中島**── キャスティングは困難ではなかったのですか。重要だと思うのですが。

**栗山**── いつも難しいね。翻訳劇の時は、若い役だと5歳から10歳年上の俳優をキャスティングする。そのままだと、子供に見えてしまうんだね。逆に、65を過ぎるぐらいになると、舞台から遠ざかり映像中心になってしまう俳優が多い。どちらも、とても不自由なんだ。伸び代がない。イギリスという国は、俳優の仕事として、若い頃はロミオ、そして老年を迎えてリア王の出来る俳優を理想として育てていく。それが俳優の一生なんだね。そのように、シェイクスピアは書いている。

**中島**── 戯曲が俳優を作り上げていくってことはあると思うんですが。

**栗山**── 戯曲を読んだだけで、全てが分かるなんてことはない。もちろん、稽古に入るまで何度も読み返しながら、舞台美術や音楽について考えついたことを何度も修正し、前へと進んでいくけど、やっぱり稽古に入って、俳優の声で見えてくることが多い。稽古場でしか見えないこともある。それは、戯曲というものが声を思い浮かべながら書かれたものだから、やはり声の音がいろんなことを示してくれるんだろうね。初日まで、稽古場では何百という声を聞くことになるわけだからね。

**中島**── そういう意味では、いいキャストですね。

**栗山**── そうですね。とっても楽しみです。今まで、三人の方とは、とても大事な作品で出会っていて、その時の俳優としての集中力も十分、記憶にあります。

とにかく、今回はイギリス演劇の核心とも言える言葉のぶつかり合いと、その瞬間の力が大事になります。やはり何もかも人間の想像力と集中力なんですね。その二つによって、役との距離感を作りながらも役になっていくのが俳優だし、それだけの密度が必要になってくる稽古場という場所を作るのが、演出家の仕事なのでしょう。

**中島**── 栗山さんのしつこさはどこから来たんだろうといつも思っていたのですが。

**栗山**── 今はすごくたんぱくな稽古ですよ。あっという間に終わっちゃう。最近繰り返すのがダメになってね。俳優が「もう1回やったら覚えられるんだけど」って、その「覚える」ことがダメなんだね。いくつものクエッションがあって、次の稽古までに何かしら自分なりに作ることこそが必要なことだと思う。同じ場面を何度もやるということは、なんだかガッチリ固めてしまうことになると思うんだよね。その場その場で、俳優が新鮮にその時感じたことを見つけ、ぶつけ合わなきゃダメなんだ。それを稽古だと思いたいね。

**中島**── 栗山さんから豊橋に向けて一言お願いします。

**栗山**── この作家が「国境って、どんどん意味のないツールになっている」って言っていたけど、やはり演劇は楽しみながら学ぶもの、世界があって、日本があって、そして私たちはここにいるんだということを自覚した上で、知らない場所に歩き出したいね。価値の多様性がぶつかり合う場所が、劇場なんだと思う。もっと「わからない?」ということが素敵にいい交わせる時代にならないかな、って思っちゃう。

**中島**── これだけの俳優さんが栗山さんとやるのですから、期待をしております。ありがとうございました。

栗山民也[くりやま・たみや]／1953年生まれ、東京都出身。初演出作品は「ゴドーを待ちながら」(80年)。昭和63年度文化庁在外研修生としてロンドンに滞在。2000年から07年までの間、新国立劇場演劇部門の芸術監督を務めた。主な受賞歴として紀伊國屋演劇賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞、毎日芸術賞第1回千田是也賞、第1回朝日舞台芸術賞、第4回朝日舞台芸術賞グランプリ、第62回芸術選奨文部科学大臣賞、第39回菊田一夫演劇賞受賞ほか。紫綬褒章受章。著書に「演出家の仕事」(岩波新書)がある。

(注1)ロイヤル・コート劇場
イギリス舞台劇団の本拠として、新鮮な作品が続々上演される、イギリス現代演劇革新の中心。
(注2)チャイメリカ
アメリカ人写真家が、天安門広場で戦車の前に立ちはだかった男の軌跡をたどりながら、現代のアメリカやそこで暮らす外国人が抱える問題をひも解いた戯曲。
(注3)アルメイダ劇場
若手アーティストを世界へ発信する場として知られる先鋭的な小劇場。

INTERVIEW：2

# へんてこりんなダンスとコトバのワンダーランド
# アリスの世界へ一緒に迷い込んでください。森山開次、まりあ

聞き手 塩見直子 穂の国とよはし芸術劇場PLAT事業制作部

**塩見** ── お二人は、どんな子ども時代だったのでしょうか。

**森山** ── これまでのインタビューでは、子ども時代は内向的で静かだったと話していたのですが、最近は、わんぱくな時代もあったし、ひょうきんで明るいところもあったと思えるようになりました。空想好きで、いろんなことを頭の中で思い描いていた少年でした。直接ではないですが、あの頃感じていたことが、いまのダンスに繋がっているように思います。

**まりあ** ── 小さい頃は、習い事やスポーツも、バスケ、サッカー、バレーボールと色々とやっていました。小学校1年生のときに、スケートのためにバレエを始めて、新しい技を覚えたり、進歩するのが楽しくて。ダンスは今も続けています。

**塩見** ── 300人を超えるオーディションの中からまりあさんは選ばれましたが、まりあさんに決められた理由は。

**森山** ── 一番はアリスが「そこにいた！」って感じですね。もちろんいいところが具体的にあるのですが。ダンス公演ではあるのですが、芝居も台詞も、両方に魅力を発揮できる子を探していて。ダンスには拙い部分もあったけど、それがまた、アリスっぽかった。アリスの言葉って、アニメなら普通に受け入れやすいのですが、実際に人が話す台詞で「へんてこりんがどんどこりん」っていわれたら、なかなか普通には受け入れられないですよね？でも彼女がしゃべると普通にふっと入ってくる。

**塩見** ── まりあさんは、アリスに決まったと聞いた時にはどう思われましたか。

**まりあ** ── オーディションでは、好きな所で側転をしたり、「へんてこりんがどんどこりん」は、英語と日本語を混ぜて変な言葉を使ったりした演技をしました。それも楽しかったです。出演が決まったと聞いた時には、「やった！」って。どんな舞台になるのだろうとウキウキしました。

**塩見** ── まりあさんはこの作品が初舞台だったのですよね。

**まりあ** ── はい。昨年は、若く初々しい、可愛いアリスを思って演じましたが、今年は昨年の経験を積んだ、可愛いだけじゃないアリスができたらなと思っています。

**森山** ── 1年経って、稽古も始まって、変わった部分がやはりあるなと感じます。再演の機会は本当にありがたいことで、また違う角度でトライできる。まりあにも初演で演じきれなかったことや、新しく湧いてきたアイデアを存分に出して、新しいアリスをつくってほしい。

**塩見** ── ダンスと言葉についてはどう思われますか。

**森山** ── 元々ミュージカルから入ったのですが、始めた頃は言葉がうまく扱えなくて。でもダンスをやればやるほど、言葉を使いたいと思うようになり、今は言葉って素敵だなと思えます。ルイス・キャロルが紡ぎだした言葉をどう聴かせたら子どもたちが興味をひいてくれるのか、悩みながら趣向をこらしながら、大事にしたいと思います。英語から日本語に翻訳されて、更に本作ではテキストの三浦直之さんの言葉に置き換えながらも、受け継いでいる「不思議の国のアリス」の原作の魅力とも言える韻を踏んだり遊ばせている「言葉」を、活き活きとまりあの声と言葉で豊かに表現してくれるところが大きな見せどころかな。「うんざり」という劇中の言葉も、まりあが発することでチャーミングだったり、豊かになる。「言葉を躍らす」ことが今回のテーマですね。

**塩見** ── 「I don't know」の台詞を喋るシーンなど、まりあさんのチャーミングさが際立っていますね。

**森山** ── まりあには、日本語と英語が混ざったまりあ独自のイントネーションの魅力と、若さがある。「I don't know」の台詞は、三浦さんの脚本ではわざわざ「あいどんの」と書いてある。そういった可愛らしい言葉の響きや、「やってられん」の「れん」が跳ねる感じに発する可愛さ。日本語を再発見するという意味では、まりあが学校の友達同士で流行っているという言葉も取り入れて楽しんでいます。

**まりあ** ── 稽古中にも、自分の周りで流行っている言葉までが取り入れて創られていくことが楽しいですし、やりやすいです。

**森山** ── 実際に演じる人の感覚を少しでも取り込んでいきたいし、演出といっても全て決めたものをやってもらうことではなく、どれだけみんなのよさを引き出していけるかが勝負です。アリスの空想、創造力から生まれた物語なので、今回はとくにみんながひとつのところに縛られることなく、ダンサーひとりひとりの発想力を試す場にしたいですね。

**塩見** ── とても魅力的なダンサーの方々がキャスティングされています。

**森山** ── いいタイミングでみんながフッと現れたキャスティングだったと思います。まりあとアリスが若い設定なので、取り囲むダンサーはある程度大人という構図をつくりたかった。特に男性ダンサーの辻本さんや島地さんは昔から知っていて、彼らも第一線で活躍していますし、稽古からいれたら2、3か月のスケジュールをよく空けてくれたなと、ラッキーでしたね。

**塩見** ── まりあさんは今後、どんなことに挑戦したいですか。

**まりあ** ── 以前は女優としてバレエはその中で少し使えたらなと思っていたのですが、この舞台を経てダンスも、演技もできることってすごいなと思うようになりました。ダンサーでも、女優でも、両方活躍できるようになりたいです。

**森山** ── まりあには本当に才能が色々あると思う。女優としての活躍もみたいし、その中でダンスも一緒に育んで、歌手にもなって、歌って踊れてと、限定しないでいろんなものを吸収すべきだと思います。楽しみです。

**塩見** ── 若い世代に向けメッセージを聞かせてください。

**森山** ── 子どもたちには可能性を縮めないで欲しい。どんな方向でも、可能性に向かって進んで行けばいい。もしそこでぶち当たったらまた違う可能性がまだまだたくさんある。それをキャッチし、楽しんで貰えたら嬉しいです。

**塩見** ── 豊橋の観客にもメッセージをお願いします。

**森山** ── 人が集って、その中で僕たちがアリスの空間をつくって、そこに冒険するかのようなつもりで来てもらいたいです。どの作品でも思いますが、観賞するだけでなく、体感して帰って欲しいですね。アリスの世界へ一緒に迷い込むつもりで観に来てくださったら嬉しいです。

**塩見** ── 楽しみにしています。ありがとうございました。

森山開次［もりやま・かいじ］／1973年生まれ。21歳よりダンスを始める。2001年エディンバラフェスティバルにて「今年最も才能あるダンサーの一人」と評された後、自ら演出振付出演するダンス作品の発表を開始。07年ヴェネチアビエンナーレ招聘。12年発表『曼荼羅の宇宙』（新国立劇場）にて芸術選奨文部科学大臣新人賞ほか三賞受賞。代表作に『夕鶴』『弱法師』『KATANA』『サーカス』テレビ『からだであそぼ』など。ダンスのみならず演劇、ミュージカル、映画、テレビ、広告など幅広い分野で活躍。

まりあ／2000年生まれ。アメリカ人の父と日本人の母を持つ。16年高校入学を機に上京、本格的に活動を始める。本作のアリス役には300人を超えるオーディションの中から抜擢された。本作品で初舞台となる。

9月15日［土］14:00開演
16日［日］12:00開演／16:00開演
17日［月・祝］14:00開演
原作＝ルイス・キャロル
テキスト＝三浦直之
衣裳＝ひびのこづえ
音楽＝松本淳一
演出・振付・美術＝森山開次
出演＝森山開次、辻本知彦、島地保武、下司尚実、引間文佳、まりあ
会場＝PLATアートスペース

こどももおとなも楽しめるダンス
# 「不思議の国のアリス」

# INTERVIEW：3

こふく劇場は2015年に25周年を迎えました。この25年の間に、何が失われ、何が生まれたのか、九州の片隅でそんなことを考えながら生まれたのがこの作品「ただいま」です。作・演出

## 旅をしながら作品が生まれていく。永山智行

聞き手・矢作勝義　穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

**矢作**――永山さんが演劇という道に進んだのは。

**永山**――高校1年生で演劇部に入ったのがスタートです。その後、進学した東京学芸大学で芝居ばかりして、親が帰ってこいというので卒業後に宮崎に帰って。せっかくだから一回地元でやってみようと思って劇団を始めたのが、結局ずるずるそのまま、今年が29年目になります。

ただ、25歳のとき、宮崎にいてもどうにもならないと悩んでいたときに、宮崎の「劇団ぐるーぷ連」を見たのです。そしたら、そこで訳のわかんない芝居をしているわけで、太田省吾さんとか大野一雄さんとか、無言劇とか、舞踏とかされているのを見て、「宮崎でも、べつに好きなことすりゃあいいんだ」と。本格的に腰を据えたのは、その出会いが大きいと思います。

**矢作**――宮崎を拠点に全国各地で公演されていますが、最初からそのことを考えて始めたのですか。

**永山**――最初は都城という私たちの住んでいる場所でしかやっていませんでした。「外のお客さんに出会いたいね」と、宮崎市でやるようになって。そして、きっかけは東京のこまばアゴラ劇場「大世紀末演劇展」かな。あと福岡の大野城まどかぴあも。地域の劇団がクローズアップされる時期と重なったと思います。一回行くと、出会いが生まれる。我々の力だけではなくて、劇作家協会ができ、劇作家大会が北九州や盛岡であり、という流れの中で、作品見てほしいし見たいと、いろんな所に行きだしました。

**矢作**――本当に毎年のように全国何カ所かでやってらっしゃるのですね。

**永山**――作品と旅をすることが、つくる過程の中にもう組み込まれているのです。つくった作品が旅をするというよりは、旅をしながら作品が生まれていく。やはりその土地に、劇場があって、見にきてくれるファンの人がいて、その土地の空気をしっかり感じながらやりたい。前回『ただいま』を上演した時は19ステージあったのですが、毎回、少しずつ手直しをしていく中でだんだん作品も変わっていきました。それが面白くて。一箇所の劇場で上演しておしまいはできなくなりました。

**矢作**――『ただいま』は初演が2015年で、今回は再演という形ですが。永山さんは手直しをされるのですか。

**永山**――私は俳優ありきなので、今この時期にこのメンバーでやるからこそ生まれるものを大事にしたいと思っています。私が「こう変えたい」とか、「こうしたい」みたいなことよりも俳優も3歳年を重ねて、感じ方、考え方、もちろん体も変わってきている、そういうものがにじみ出るようなものになればいいなと思っています。

**矢作**――『ただいま』で描こうとしたものとはどのようなことでしょう。

**永山**――いつも聞かれるけど、正直なところは自分でも分からなくて、その分からなさを追いながら作品を作ってますが、感覚としては近いと思うのです。ただ、きっかけは、戦後70年をどう捉えるかが初演の2015年のときには大きくて、戦争を直接的に体験した人が少なくなっていく中で、何が失われてきたのか、地に足を着けて確かめたいというのが作品をつくったときの一番の手がかりですね。

**矢作**――各地のいろんな反応の中で印象的だったのはどのようなことでしょうか。

**永山**――カーテンコールで涙を流した方がいました。それが何だろうと今もわからないのですが、こういう面白いお話がありますよと、ただ物語とか登場人物をお客さんに渡すということではなく、それを演じている俳優の人生も込みで渡すことは私にとっての演劇のリアリティだし、多分うちの俳優たちも同じで、誰がやってもこの役は一緒ではなく、そうすると必然的に俳優がどういう人生を歩んでいるかになってくる。そういう意味で、物語の登場人物をもちろん見ていただくと同時に、こういう人間が宮崎で暮らしていて、こふく劇場という劇団で俳優をやっていて、その人間が今目の前に立っている。という、そのことも感じてもらえるとうれしいなと思いながらやっています。そういう意味で、カーテンコールでは皆で歌を歌うのですが、お芝居の中でなくそのときに、何とも言えぬ幸福感を感じたという方がいらっしゃいました。それが印象的というか、私たちがやろうとしていることが何らか伝わったのかなと思います。

**矢作**――宮崎の香りというか、宮崎の色を背負っているという感覚はありますか。

**永山**――多分自然と人間との距離の取り方の問題だと思うのです。今も私が住んでいるところは、街灯もなく、月のないときだと真っ暗なのです。子どもの頃、トイレが家の外だったから、夜中にどんなに暗かろうが行かざるを得ないのです。それが自分の体験として体に染み込んでいるので、この世には闇があるということは体感として感じているのです。高いビルもないし、ふっと見上げれば向こうに山が見える。そういう場所で暮らしていることで生まれる感覚。詩というのは、やはり自然と対峙する中で生まれると誰か書いていたのですが、どんなに都会的な場所であっても夜は来るし朝は来るし雨は降る。自分の手でどうすることもできないものが確実にある。それは例えば、この時代に男として生まれるということや、いつか死んでしまうということや、ある日不意に誰かを好きになってしまうこともそうだと思います。それが確実にあるということを、自然と向き合う中で体感することは大きい。俳優が舞台上に立つとか作品をつくるときに、そこを手掛かりとしたら、それは結果として宮崎で生まれたものになっていくと思います。

**矢作**――豊橋という、初めての劇場での上演となりますが、どのようなことを期待されていますか。

**永山**――出会いだなと思うのです。その出会いも、自分の手ではどうすることもできないし、お金を払って買えるものでもない。自分の人生と別の人の人生がいつどの瞬間に、どう混じり合うかなんて私にはどうすることもできない。だから私たちがこの豊橋に来て、皆さんと出会って、同じ時間と同じ場所を過ごして、私の人生の中に新しい登場人物たちがでてきたり、皆さんの人生の中に新しい出来事とかエピソードが増えていくことが、私たちの人生のドラマかもしれない。劇団のドラマとして、また、この豊橋という場所で出会いのドラマがこうやって待っているということ、それが私たちには一番うれしい時間だなと思います。

**矢作**――ありがとうございます。

永山智行［ながやま・ともゆき］／劇作家／演出家／劇団こふく劇場代表。1967年宮崎県都城市生まれ。2001年『so bad year』でAAF戯曲賞受賞。地点の演出家・三浦基との共同作業として、『お伽草紙／戯曲』（劇団うりんこ・2010）、『Kappa／或小説』（地点・2011）の戯曲を担当など、劇団外での上演も多い。06年10月から約10年間（公財）宮崎県立芸術劇場の演劇ディレクターを務め、九州の俳優らによるプロデュース公演「演劇・時空の旅シリーズ」を企画・演出するなど、地域における演劇の質の向上と、広がりを願い活動している。

9月8日［土］・9日［日］14:30開演
作・演出＝永山智行
出演＝あべゆう、かみもと千春、濵砂崇浩、大迫紗佑里、中村幸
会場＝PLATアートスペース

PLAT小劇場シリーズ
劇団こふく劇場
「ただいま」
穏やかに日常を暮らす、その普通の人々の
かけがえないホームドラマ

そうなんだ、きみとおれ
いっしょに風の音をきく、いっしょに笑い、はしる！

# KAKUTA座談会

左より 成清正紀、野澤爽子、多田香織、若狭勝也、四浦麻希、桑原裕子、谷恭輔／聞き手 塩見直子 穂の国とよはし芸術劇場PLAT事業制作部

**塩見**――KAKUTAは結成22年になり、PLATには2016年の『愚図』以来、2年ぶりの登場です。今回の童話『ねこはしる』を作品に、お選びになったきっかけは。

**桑原**――ともともは本の読解やせりふ咀嚼して発する技術をもっと勉強したいよねということから始まって、それを本気で作品として作ってみようとなったのが2004年の朗読公演でした。「ねこはしる」は、いろんな生き物たちが主観で物語を語っていく、長台詞の集合体みたいな本なのも大きかったですね。

**塩見**――子ども向けとして作る意図はありましたか?。

**桑原**――私が「ねこはしる」を友達からプレゼントされて読んだのが二十歳の誕生日だったんで、子ども向けという感覚はなくって、子どもから大人になるステージの境目だったり、大人になり切れない人にも響く本という感覚がありました。未就学児にも観てもらう企画に挑戦したのはつい最近です。

**成清**――『ねこはしる』は1回目はギャラリーで、2回目はプラネタリウムを会場に映像を使いました。10年経った3回目で、子ども向けの要素を入れようとなりました。それは、その間に桑原がミュージカル「ピーターパン」の演出をしたり、我々が歳をとったこともあるかもしれない。

**桑原**――子どもを持つ世代が、子どもを置いて観に来られないなら、子どもも一緒に見ればいい。子どもには想像力や、吸収力や、見る力がすごくある。全部は分からなくても、残るものがあるし、つまらないお芝居だと眠くなるのが子どもで、俳優たちにとってはとてもシビアです。そういう騙せないお客さんや、赤ちゃんが泣いている中で、真剣なシーンをやるのは、精神的に鍛えられますね。

**若狭**――開演前に子ども向けのイベントをしましたが、芝居の内容は変えません。でも絶対分かってくれる。実際、小学生3年生くらいの子がストーリーを理解していて、感動して泣いてくれていました。

**四浦**――私はランという猫の小さい頃の役だったのですが、公演が終わった後にそのままの格好で挨拶に出たら、みんなが飛びついてきて嬉しかった。何年も経った今でも、会うと「ランだ!」と言ってくれます。覚えていてくれるってすごい。一生の宝物になります。

**若狭**――朗読公演の頃は、語りもキャストも全員本を持って出た。説明の部分を語りが読み、俳優は動物の台詞を話して演技するので、見やすかったと思います。

**塩見**――ネコのランが大人になるのに合わせて俳優さんも入れ替り「成長したんだ!」とドキっとしました。

**桑原**――それが、見ている子どもには、トラウマだったらしいです。大人は感動しても、子どもはなんで人が変わったの、ってついていけないみたいで。

**成清**――俳優が入れ替わるという演出はすごいなと思った。

**桑原**――最初、小さな男の子のイメージで捜していたのですが、最終的に猫はやはり魚の大きさを超えるんですよ。同じくらいの小ささから始まった友情が、大きさが変わっても繋がる、とても現実的な物語です。それゆえに猫と魚それぞれの生き物としての使命や宿命があることも、より伝わって来るのではないか。子ども同士で終わるのではなく、青年になったランと魚で終わりたかった。とか言って、全く内容が変わったらすいません。

**若狭**――『ねこはしる』には子どもが大人になるだけでなく、壁を越えていくエネルギーがある。僕らが休団して、次に再スタートするという時のエネルギーみたいなものに共通するものが、この作品にはあると思います。

**野澤**――「出会いと別れを繰り返しながら」というフレーズがあるのですが、それが背中合わせだったり向き合ったり。もし産まれてなかったら、出会いが無ければ、私はいまここにいない。そういうことを、顧みさせてもらえる。それが今まさに充電期間を経て、再始動という転換期を迎えるKAKUTAが、このタイミングで上演ができるのも、まさにここぞという時の作品という気がします。

**四浦**――我々各々の人生で出会いと別れがそれぞれにあった分、一緒に走っているような気持ちになったりして、自分のタイミングによって得るものが変わる作品です。

KAKUTA／1996年 結 成。2001年より桑原裕子が脚本を手掛け、年2、3本のペースで作品を上演している。手法はスタンダードに。スタイルは緻密に。発想は奔放に。いつまでも色褪せず、現代人の心を揺さぶり続ける上質な娯楽を創作する。主な受賞歴として、07年桑原裕子作『甘い丘』が岸田戯曲賞最終候補。09年同作再演の作・演出として桑原裕子が平成21年度（第64回）文化庁芸術祭芸術祭新人賞を受賞。14年桑原裕子作『痕跡《あとあと》』が第18回鶴屋南北戯曲賞を受賞。同作品で岸田戯曲賞最終候補。

TALK

**桑原**――子ども向けというより、「親子」ということを強調し、親の側の世代に感じて欲しいこと、子どもたち世代に感じて欲しいこと、どちらもよくばりにやりたい。

**塩見**――今回は、どこか大きく変わるのでしょうか。

**桑原**――工藤直子さんの本は完成されていて素晴らしいので、その中でどれだけ遊べるかです。今回は、ピアニストの扇谷研人さんを音楽監督、歌手に花れんさんを新たに迎えて、オリジナルの音楽を作って頂きます。シーンも新しく作り、キャスト達も歌う予定です。

また、前回は出演者が20人以上でしたが、コンパクトになった人数の中で、どんなことができるか。公演の時は、劇団員だけでやりました。そういう感覚を思い出す公演になると思います。当時の稽古の時に、「10人で池をつくるには」と、1日中池を作る稽古をやったりしていました。今回はそういうことも初心にかえってやってみたいですね。

**塩見**――出演は劇団員とオーディション合格者数名とゲスト1名をお迎えですね。

**桑原**――そうですね。劇団公演に立ち返りたい。本公演では、作品的に劇団員だけでは難しいのですが、やはり劇団員だけでやるのは力になる。今回は魚役でゲストの添野豪さんという劇団ペテカンのメンバーが入ることで、役柄的にもどう混じり合えるのか楽しみです。

**塩見**――22周年を迎えて、また充電期間を経てKAKUTAはこれからどこに向かうのでしょうか。

**桑原**――私は、若いメンバーの野望を聞いてみたい。

**多田**――面白い作品をとにかく創って、KAKUTAのお芝居を知らない人に、もっと知ってほしいです。劇団員の力が強いという劇団になりたい。あの役者がいる、という劇団にもっとなって、そのうちの一人になりたいです。

**谷**――客演として『ねこはしる』『アンコールの夜』と本公演の『愚図』に出演し、そして今回劇団員になり、ついていくのに必死ですが、劇団内の話し合いの時に、芝居を上演する中でお互い切磋琢磨しあうという話が出た。それは油断できないし、若手にもチャンスがあると、その点では勝負だと思いました。必死に登って行きたいなと思います。

**桑原**――今後のKAKUTAがどこにいくのか、慎重に構えるのではなく、思い切り馬鹿なことやりたい。怖いところにこそ飛び込め、失敗しに行け。それで痛い目見たら、強くなる。休止前はちゃんとしなきゃという思いを背負い過ぎていた気がします。誠実であればあるほど息苦しくもなる。若手も入って、個が強いメンバーになることで、「負けないぞ」とお互いに厳しくなります。ぶつかることもあるでしょうが、そういう体験を怖がらず、馬鹿で強くなりたい。それができたらまた面白いショーが始まる気がします。ナイショですけど、2025年の解散前提で再開するのはどうかという提案もしています。終わらないと思うからゆるゆると続いてしまうんじゃないか。終わりがあると思ったら、1本1本必死にやり、そして終わるまでにどこに到達していたいかが見える。その上で2025年にまだやりたいと思った時には、また新しくKAKUTAが始まればいい、と思ってます。

**塩見**――ありがとうございました。豊橋でお待ちしています。

**10月6日［土］・7日［日］14：30開演**
**作＝工藤直子「ねこはしる」（童話屋刊）**
**構成・脚色・演出＝桑原裕子**
**音楽＝扇谷研人／うた＝花れん**
**会場＝PLAT アートスペース**

**PLAT小劇場シリーズ**

# KAKUTA「ねこはしる」

こどものあなたへ、これからおとなになるあなたへ、
いのちを産んだあなたにこそみて欲しい、いのちのメッセージ

INTERVIEW：4

アメリカSF小説きっての叙情詩人、
レイ・ブラッドベリの傑作ディストピア小説を舞台化。

# 「静かに忍び寄る不安」今やらなければと思った。

演出 白井晃

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

**矢作**――今、なぜ『華氏451度』なのでしょうか。

**白井**―― KAATの芸術監督として、20世紀の近代戯曲、近代文学に注目してきました。20世紀の初頭の世界の状況と、100年経った今は相似形をなしています。社会体制の変革や産業革命があって、20世紀初頭には大きな科学の発展と技術革新がありました。21世紀になって再び科学は違う次元で進化をとげました。100年前に電話などの通信機器が発展し、ラジオやテレビが出てきたと同じように、今はネットが世界を支配するようになり、社会に大変革が起こりました。その時、自分たちが作ったものに翻弄されている感覚は、今も同じではないか。その時代に書かれた作品をこういった視点で見てみると、今がよく見えてくるように思いました。そういう中でレイ・ブラッドベリの『華氏451度』をどういう形で戯曲化するか考えていたところに、この作品の愛読者だった長塚さんが「僕に本を書かせて欲しい。」と名乗り出てくれたんです。私としては、これほど嬉しい話はなくて、渡りに船でまとまりました。

『華氏451度』には、報道管制とか、全体国家の圧力のようなものが静かに忍び寄っているような不安が描かれています。豊橋で今年やられる作品群に、そういう、影が漂っているような作品が多いのは、今、表現者たちがその危機感をつのらせているからだと思うのです。私も、数年前だったら『華氏451度』をやりたいと思いませんでした。今やらなければと思ったのは、社会の動向と密接に関係していると思います。

**矢作**――今回の脚本は、トリュフォーの映画版をベースにしているのですか。

**白井**――映画とはほとんど何も関係なく、むしろ長塚さんは、レイ・ブラッドベリへのリスペクトを込めて小説をもとにしています。会話は、そのまま小説に書かれている言葉で構成をしています。配役も、できうる限り少人数でやろうということで話し合いをして、最終的に7人にしました。

**矢作**――今回、出演される皆さんには、どういったことを期待されているのでしょうか。

**白井**――吉沢さんと土井さんと吹越さんは初めてです。美波さんと堀部さん、粟野さんが2回目、草村さんも15年ぶりで2回目の出演になります。

吉沢さんは、10年前ぐらいから何度かご一緒したいとお願いしたことがあったんですが、タイミングが合わずなかなかチャンスがなくて。当時から、何か内に秘めたものがある人だなと思っていました。俳優として充実してきた今、ここに至る吉沢さんが、俳優として培ってきたものを噴出していただけると期待しています。

美波さんは、表現力のある素敵な女優さんなので、難しい役ですが、裏表みたいな存在の女性を1人で2役やっていただくことにしました。彼女の魅力を充分に発揮してもらえるものと思っています。

吹越さんは、役者としての存在の仕方とか生き方とか、言ってみればご本人の人間性そのものを出していただけるような役どころではないかなと思っています。稀有な表現者であり、役柄をどう表現するかというテクニカルなことよりも、吹越さんが俳優としてお持ちの存在力に期待しています。

堀部さんにも同じような思いが強くあります。モンターグを優しく見守りつつ後押しするという役どころは、やはり堀部さんの人となりというか、堀部さんご本人の存在感に近いのだと思います。ベテランのお2人に、そんな部分をゆだねたいと思っています。

屈強な肉体がある粟野さんには、是非ともファイアマンたちをやって欲しいと思いました。元々、原作ではファイアマンは2人とも男性なんですが、1人女性が入って欲しくて、土井さんは身体表現にも長けた人なので、その強さにも期待してコンビを組んでもらうことにしました。とにかくエネルギーがある2人なので、『華氏451度』という世界を押し出しているプレッシャーというか圧力みたいなものを2人に出してもらえたらと思っています。

「本とともに私を焼いてくれ」とモンターグに言う人物を想像した時に、最初に頭の中のイメージとして、草村礼子さんを思い浮かべました。モンターグが自己改革してゆくきっかけになる存在でもあり、物語を動かす起爆剤であり牽引してく存在として、草村さんにはぜひともご出演して頂きたいとお願いしました。

**矢作**――演出は、どんなことを考えてらっしゃいますか。

**白井**――今のところは、舞台美術は大きな本棚をイメージしたものを考えています。本に囲まれた空間で、本が意味をなさない場所。本は読まなければ意味を持たない。でも1冊の本の中には、作家が影響されてきたものの蓄積が反映されている。その本を読んだ作家が、またそれに触発されて新たなものを書くという、人類の文化の蓄積がそこにある。記憶や英知が蓄積された、本の地層でできている空間をイメージしていて、そこに炎が着くことによって、本たちが白く灰になっていく。積み重ねてきたものを自らが消滅させる。それはまさに、人間が自分の腹の中に大きな穴を空けている、そんな構図になるのではないかと考えています。火なので、実際使いたいと思いますが、舞台上では技術的な課題もあるので、映像も含めて表現の可能性を広げられたらと思っています。

**矢作**―― KAATの芸術監督として、作品を地方で上演することを、どう位置づけていらっしゃるのですか。

**白井**――各自治体に、基幹の劇場ができあがっていく中で、地域の基幹劇場が個別に戦っていてもなかなか大変だと思います。公共劇場同士が、手を取り合うことは大事なことで、共同で作るケースがあってもいいし、どちらかの劇場が作ったものを引き受けて上演するようなこともあってもいい。東京や横浜や豊橋で1つの作品が丹精込めて作られたとしても、そこだけで終わってしまうのは、あまりにもったいない。

それと、多くの観客たちとの出会いを作ることも、劇場の大きな役目だと思います。作品は観客に見てもらって初めて成立するものです。そのことを考えると、より多くの出会いを作り、互いに手を取り合うことは、これからの演劇界では必須になってくると思います。

**10月27日[土]・28日[日]13:00開演**
**原作＝レイ・ブラッドベリ**
**演出＝白井晃**
**上演台本＝長塚圭史**
**出演＝吉沢悠、美波**
**堀部圭亮、粟野史浩、土井ケイト、草村礼子**
**吹越満**
**会場＝PLAT主ホール**

**ーこの温度で書物は燃えるー**

# 「華氏451度」

白井晃[しらい・あきら]／演出家、俳優。京都府出身。早稲田大学卒業後、1983-2002年、遊◉機械/全自動シアター主宰。劇団活動中よりその演出力が認められ、多くの演出作品を手がける。2014年4月KAAT神奈川芸術劇場アーティスティック・スーパーバイザー(芸術参与)。2016年4月、同劇場芸術監督に就任。受賞歴として、01、02年の演出活動にて第9回、第10回読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。05年演出『偶然の音楽』にて平成17年度湯浅芳子賞(脚本部門)受賞。12年演出のまつもと市民オペラ『魔笛』にて第10回佐川吉男音楽賞受賞。

撮影：西野正将

# INFORMATION

## PLAT主催公演情報

**託児サービス対象公演**
要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様¥500。お申込み、お問合せはプラットチケットセンターまで

**マイセレクト4 対象公演**

### チケットの購入・お問合せ
### プラットチケットセンター

◉劇場窓口・電話0532-39-3090［休館日を除く10:00－19:00］
◉オンラインhttp://toyohashi-at.jp［24時間受付・要事前登録］

### U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。

◉料金＝U24［24歳以下対象］：公演ごとに指定する席種の半額／高校生以下：一律1,000円
◉購入方法＝各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
◉その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

二兎社公演42
「ザ・空気ver.2 誰も書いてはならぬ」

安田成美、眞島秀和

**8/30［木］**19:00開演・**31［金］**13:00開演　好評発売中
二兎社公演42
31日のみ
**「ザ・空気ver.2 誰も書いてはならぬ」**
舞台は報道各社の政治部が入居する国会記者会館。ある出来事をめぐり、考え方も立ち位置も異なる記者たちが抜き差しならない状況に追い込まれる。●作・演出＝永井愛●出演＝安田成美、眞島秀和、馬渕英里何、柳下大、松尾貴史●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席5,500円、A席4,500円、B席3,000円ほか

**9/8［土］・9［日］**14:30開演　好評発売中
PLAT小劇場シリーズ
劇団てふく劇場
**「ただいま」**
マイセレクト4
●作・演出＝永山智行●出演＝あべゆう、かみもと千春、濵砂崇浩、大迫紗佑里、中村幸●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・日時指定・整理番号付］一般3,000円ほか

**9/15［土］**14:00開演
**9/16［日］**12:00開演／16:00開演　16日12:00のみ
**9/17［月・祝］**14:00開演
マイセレクト4
**「不思議の国のアリス」**
●演出・振付・美術＝森山開次●原作＝ルイス・キャロル●テキスト＝三浦直之●出演＝森山開次、辻本知彦、島地保武、下司尚実、引間文佳、まりあ●会場＝PLATアートスペース●前売予定枚数終了：当日券については9月以降にお問い合わせ下さい。

**9/29［土］・30［日］**13:00開演　好評発売中
29日のみ
**「チルドレン」**
●作＝ルーシー・カークウッド●演出＝栗山民也
●翻訳＝小田島恒志●出演＝高畑淳子、鶴見辰吾、若村麻由美●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席7,500円、S席ペア14,000円、A席6,000円、B席4,000円ほか

**10/6［土］・7［日］**14:30開演　好評発売中
PLAT小劇場シリーズ
KAKUTA
7日のみ
マイセレクト4
**「ねこはしる」**
●作＝工藤直子「ねこはしる」（童話屋刊）●構成・脚色・演出＝桑原裕子●音楽＝扇谷研人●うた＝花れん●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・日時指定・整理番号付］大人3,000円、こども（4歳～高校生）500円ほか

劇団てふく劇場
「ただいま」

**10/8［月・祝］**17:00開演
劇団四季　ファミリーミュージカル
**「魔法をすてたマジョリン」**
魔女のマジョリン、123才。でも魔女の世界ではまだ小学生。魔法を使ったり、空を飛んだり、ドキドキ、ハラハラ、目が離せません！思いやる心、愛することの大切さがつまったミュージカルです。●初演オリジナル企画・演出＝浅利慶太●台本＝劇団四季文芸部・梶賀千鶴子●作曲＝鈴木邦彦●振付＝飯野おさみ、加藤敬二●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席一般5,400円（小学生以下3,240円）、A席一般3,240円（小学生以下2,160円）●前売予定枚数終了：当日券については10月以降にお問い合わせ下さい。

**10/27［土］・28［日］**13:00開演　好評発売中
28日のみ
**「華氏451度」**
●原作＝レイ・ブラッドベリ●演出＝白井晃
●上演台本＝長塚圭史●出演＝吉沢悠、美波、堀部圭亮、粟野史浩、土井ケイト、草村礼子／吹越満●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席7,000円、S席ペア13,000円、A席5,000円、B席3,000円ほか

**11/2［金］**19:00開演
**野村万作・野村萬斎　狂言公演2018**
人間国宝・野村万作と現代劇や映画など幅広く活躍する野村萬斎が率いる「万作の会」による狂言公演です。●出演＝野村万作、野村萬斎ほか万作の会●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席5,000円、A席4,000円、B席2,000円ほか●チケットお取り扱いについてはお問い合わせ下さい。

**11/3［土・祝］**13:00開演／18:00開演
**11/4［日］**13:00開演／17:00開演　3日13:00のみ
高校生と創る演劇
**「滅びの子らに星の祈りを～Dystopia before Utopia～」**
公募による高校生出演者とスタッフが、劇場やプロのスタッフとともに創造する演劇第5弾。作家・演出家・俳優として活躍している須貝英が脚本・演出として、東三河の高校生と未来を舞台にした作品に挑戦します。●会員先行＝9月1日（土）●一般発売＝9月15日（土）●脚本・演出＝須貝英●出演＝オーディションで選ばれた高校生●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・日時指定・整理番号付］一般2,000円、高校生以下500円ほか

野村万作・野村萬斎　狂言公演2018

野村万作

野村萬斎

KAKUTA「ねこはしる」

カンパニーデラシネラ
「ドン・キホーテ」

撮影・釣井泰輔

**11/9［金］**19:00開演
**11/10［土］・11［日］**13:00開演　10日のみ
**「ゲゲゲの先生へ」**
水木しげるの作品群とその哲学思想や世界観を原作に、前川知大が現代を舞台にしながらも日常に隣り合わせた少し不思議な世界を描きます。●会員先行＝8月4日（土）●一般発売＝8月18日（土）●原案＝水木しげる●脚本・演出＝前川知大●出演＝佐々木蔵之介、松雪泰子、白石加代子ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席8,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか（発売日初日は、お一人様一申込みにつき4枚までの制限有り）

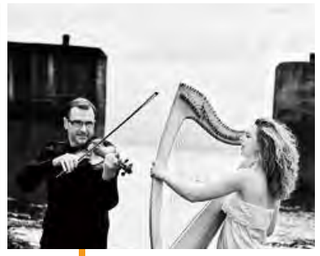
**11/24［土］**14:00開演
**林家正蔵 独演会**
2016年12月にKAKUTA「愚図」で俳優として登場した林家正蔵が、落語家としてプラットに登場！●会員先行＝8月25日（土）●一般＝9月8日（土）●出演＝林家正蔵●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般2,800円ほか

**12/1［土］・2［日］**14:30開演　12月1日のみ
PLAT小劇場シリーズ
カンパニーデラシネラ
マイセレクト4
**「ドン・キホーテ」**
カンパニーデラシネラが手掛ける、大人も子どもも楽しめる古典名作劇場第二弾。17世紀初頭に発表されたスペインの作家、ミゲル・デ・セルバンテスの小説をもとにした不可思議な美術と身体による、驚きに満ちたパフォーマンスです。●会員先行＝9月1日（土）●一般発売＝9月15日（土）●原作：ミゲル・デ・セルバンテス●演出＝小野寺修二●出演＝大庭裕介、崎山莉奈、藤田桃子ほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・日時指定・整理番号付］一般3,000円ほか

**12/9［日］**17:00開演
**「ケルティック・クリスマス・コンサート～アイランド・ストーリーズ～」**
神秘、郷愁、自然の香り、人の温もりを美しい旋律と楽しいリズムに乗せ、選りすぐりのアーティスト2組が贈る伝統のケルト音楽コンサート！●会員先行＝7月8日（日）●一般発売＝9月8日（土）●出演＝アルタン（バンド）、カトリオーナ&クリス（ハープ&ヴァイオリン）●料金＝［全席指定］一般5,000円、ユース（24歳以下）2,500円●会場＝PLAT主ホール

「ケルティック・クリスマス・コンサート～アイランド・ストーリーズ～」

アルタン



カトリオーナ&クリス

立川志の輔 独演会

**12/24［月・休］**13:30開演
**立川志の輔 独演会**
古典・新作を問わず落語に新しい息吹を吹き込む、大人気の立川志の輔による独演会です。●会員先行＝9月22日（土）●一般発売＝10月6日（土）●出演＝立川志の輔●料金＝［全席指定］一般4,000円ほか●会場＝PLAT主ホール

**2019/1/19［土］**16:00開演　ライフポートとよはし
**「東京フィルハーモニー交響楽団 ニューイヤーコンサート ～オール・チャイコフスキー・プログラム～」**
日本のオーケストラとして最古の歴史をもつ東京フィルハーモニー交響楽団が、指揮に山下一史、ヴァイオリンに大谷康子を迎え、オール・チャイコフスキー・プログラムで新年を華やかに彩ります！●会員先行＝9月8日（土）●一般発売＝9月22日（土）●指揮＝山下一史●ヴァイオリン＝大谷康子●管弦楽＝東京フィルハーモニー交響楽団●曲目＝ヴァイオリン協奏曲、交響曲第4番ほか●会場＝ライフポートとよはし コンサートホール●料金＝［全席指定］S席一般4,500円、A席一般3,000円ほか

若手音楽家育成事業
**プラットワンコインコンサート**
「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・整理番号付］500円
**12/19［水］**14:00開演
●会員・一般同時発売＝9月2日（日）
Trio Glanz［トリオ・グランツ］野本淳之亮（クラリネット）、黒川真洋（チェロ）、山下響（ピアノ）
**2019/1/5［土］**14:00開演
●会員・一般同時発売9月2日（日）
河合雪子（フルート）
**2019/2/6［水］**14:00開演
●会員・一般同時発売12月19日（水）
Le Bois Quartet［ル・ボワ・カルテット］宇佐見 優（ヴァイオリン）、金谷寧々（ヴァイオリン）、山内佑太（ヴィオラ）、兵藤雅晃（チェロ）
**2019/3/29［金］**11:30開演
●会員・一般同時発売12月19日（水）
松本純奈（オーボエ）

LOITER
バラコの寄り道ぷらぷら

# 「わからないから、わかりたい」

芸術文化アドバイザー
**桑原裕子**

「自分が全能になったらどんな力を得たい?」

先日、友人とこんな話で盛り上がりました。全能なんて書くとかっこいい感じですけど、要は「もしも超能力が使えたら…」というような、中学生っぽい話題です。瞬間移動できる力?飛べる力?治癒能力があるなんてのもいいな。透明人間になりたいというのは、じっさいに中学時代何度も思い描いたスーパーパワーですが、むしろ我々大人は姿を隠すより存在を誇示したいくらいですから、なし。世界を平和にする力?全能ならばそのくらい言いたいところだけど、どことどこの国が和平条約を結んで…いや、それには歴史を変える必要があるか…ううむ、煩雑な国際情勢を思うと、今ざっくりとんなことをいうのは幼稚すぎはしまいか。

そこでもう一歩現実的な世界平和につながる能力として出たのは、「世界中の言語を統一する能力」。言語の隔たりがなければ、世界中の人たちともっと対等に、柔軟に、そして親密に語り合えるのではないか。「うちの猫と話せたらいいなー」などとその時ぼやぼやした頭で考えてた私は、すぐさまその案に鞍替えしました。でもそれはもしかすると、ちっとも英語を喋れないくせにアメリカ大陸横断の一人旅を控えていたからかもしれません。

そんなわけで今、アメリカはネバダ州ラスベガスにてこの原稿を書いています。セゾン文化財団の「サバティカル」という助成を受け、一か月の休暇に出ているのです。「サバティカル」は普段脚本を書いたり演出をしたりとアウトプットに明け暮れる日々を送っている人間に、ちょっと旅でもしてリフレッシュしていらっしゃいと援助してくださる、なんとも懐の深い助成です。

出発して約一週間。これからあと三週かけて、車や鉄道でニューヨークまで渡り、その後は欧州へ向かう予定。英会話の勉強といえば「スピードラーニング」の初心者編をほんの少し聞きかじったくらいで、出発の直前まで舞台に出演したこともあり、たいした準備もせず来てしまいました。

最初の出発地、ロサンゼルスではユースホステルに宿泊しました。滞在しているのはほとんど私のような外国人、つまりアメリカ以外の人たちだったので、お互いにつたない英語で話しました。それが面白くて、いつの間にか積極的に話しかけている自分がいました。

言葉がわからないことは不便です。だけど、わからないからわかりたい、という感情がわくのも事実だと、ここにきて感じます。

車でラスベガスに向かう途中、平野の真ん中にある小さなダイナーへ立ち寄りました。店の名は「バグダッド・カフェ」。同名の映画がありますが、まさにその実在するカフェ!お店を切り盛りするのはおばあさんの女主人。コーヒーは麦茶のように薄いけれど、おばあさんのもてなしは天下一品で、どんな旅行者にも優しく声をかけ、映画を見た人には店の中で写真を撮ってくれ、帰り際には両頬にキスをしてくれました。

店を出るという時に突如大雨が降って足止めを食らい、雨宿りをする間中おばあさんがいろんな話をしてくれました。話したのは、店から離れた自宅のことやとても賢いお孫さんのこと、そして、息子さんが亡くなったこと。英語がほとんどわからない私でもその哀しみは理解できたし、私が哀しんだことをおばあさんも理解していました。

私が俳優で台本を書いているというと、「私もよ!」といって持ってきたのはなんと日本語の戯曲。おばあさんが描いた戯曲を誰かが日本語訳にした、手作りの本でした。

少し読ませてもらい、何とか英単語を並べて感想を述べると、おばあさんは「この本、あなたにあげる」といって私に持たせてくれ、私たちはもう一度強く抱きしめあって、おばあさんはもう一度、私の両頬にキスをしてくれました。

思いがけず日本語にふれた不思議な出来事だったけれど、もし世界の言語を統一するパワーを持ったとして、私はおばあさんとこんな話をしたろうか。ここがもし日本なら、私はただ雨宿りをして帰ったのではないか。

「いつか私、この本をやってみます」下手な英語なりにそう伝えようと思えばできたのかもしれないけど、その約束は、次にここを訪れた時に話そうと思い、胸の中にしまいました。




SUPPORT

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

有限会社 魚伊
電話52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役　竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 〒440-0035 Tel.0532-62-1331(代)Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 〒435-0007 Tel.053-422-3628(代)

吉野設計研究所
http://www.440a.co.jp

グロトリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科　婦人科（不妊治療）
豊橋市新本町23

KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など
豊橋・豊川障害年金相談センター
初回相談無料 ☎0120-891-498
豊橋市花中町 160-9　障害年金専門社会保険労務士　竹下英司

看板広告　アラキスタヂオ
豊橋市上伝馬町16　電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

医療法人慈豊会
大島整形外科クリニック　院長 大島 毅
東田町井原39の7（市電赤岩口終点前）電話62-5511(代)

ONOCOM 株式会社 オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・消化器科・呼吸器科
伊藤医院　伊藤之一　伊藤文二
豊橋市小池町字原下35　電話45-5283（代）

創業文政年間
きく宗
豊橋市新本町40　電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2　TEL53-2809

豊橋銀行協会（順不同）
三菱東京UFJ銀行　みずほ銀行　静岡銀行　名古屋銀行
三井住友銀行　三井住友信託銀行　清水銀行　第三銀行
十六銀行　愛知銀行　中京銀行　大垣共立銀行

御菓子司
若松園
創業江戸

気まぐれコンサート
事務局／0532-62-9259（小川恵司）

安心・安全な地下駐車場
パーク500
ソノの親子の看板が目印
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は
30分150円を30分100円（上限4時間まで）に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌　院長 塩之谷 香　副院長 市川義明
豊橋市植田町関取54　電話0532-25-2115（代）

豊橋名産
ちくわ

井上皮フ科クリニック
診療時間　月・火・木・金 10:00〜13:00 16:00〜19:00
土 10:00〜14:00　休診日＝水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久　豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

本の豊川堂
本店・カルミア店・アピタ向山店・プリオ豊川店
セントファーレ田原店・ささしまグローバルゲート店

植物専家
ねりや花でん
ココラフロント　ホテルアークリッシュ 1F

ISO 9001　ISO 14001　愛知ブランド企業　認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

Storyteller tells the Story
物語コーポレーション

JEANS SHOP YAMATO
豊橋 つつじが丘 ／ 豊川 千歳通り

生活にファインクオリティ
sala

広告募集


TICKET CENTER

## チケットの購入・お問合せ

**プラットチケットセンター**

電話・窓口
**0532-39-3090**［休館日を除く10:00－19:00］
オンライン
**http://toyohashi-at.jp**［24時間受付・要事前登録］

## プラットフレンズ募集
## 入会金・年会費無料

特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページからご登録いただけます。

## U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、
若い人にお得な料金を設定しています。
料金
U24［24歳以下対象］：公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下：一律1,000円
購入方法
各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話＝0532-39-8810［代表］
開館＝9:00－22:00 休館日＝第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅（JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道）、
新豊橋駅（豊橋鉄道渥美線）直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

**穂の国とよはし芸術劇場 PLAT**